

『白鯨』のかくれた意味と象徴について (3)

Secret Meanings and Symbols in *Moby Dick* (3)

前 田 禮 子

Reiko MAEDA

今回述べるのは、主として New Bedford とその地の Spouter-Inn 亭のもつ意義についてである。New Bedford は実在のかつての捕鯨港であるが、実在の地名であるためにかえて、この港の意義が見逃がされがちである。New Bedford という地名には象徴としての意味が含まれているのである。第23章の *The Lee Shore* あたりまでに Ishmael は Pequod 号の航海の意義と象徴についてほぼ全面的に語ってしまう。今回は、第2章 *The Carpet Bag* と第3章 *Spouter Inn* の主題を取り扱うことにする。

Ishmael が Horn 岬と太平洋に向って出発するために New Bedford に着いたのは土曜日の夜である。彼は月曜日まで二晩ここで過すことになる。降誕祭の朝 Pequod 号が出発するまで、一週間 Ishmael は、New Bedford と Nantucket で準備期間を過すことになる。第1章では、心の準備がととのい、第2章では、行動が開始する。

New Bedford という語には、かくされた意味がある。Bed には、棺台の意が、ford には、堅固な砦、岩、などの意がある。New Bedford で、Ishmael は、Peter Coffin の宿に泊まるが、Bedford も Peter Coffin もどちらも岩のような棺台の意がある。Pequod 号が、アメリカ杉材でできた棺台であったことと、白鯨が、Ahab の棺台であったことと関連があるだろう。Ishmael は、Nantucket を Tyre of this Carthage (p. 31) と呼ぶが、Tyre の原義は岩である。Trap (p. 32, 33) という宿屋の名前も、落し戸、踏台、黒い火山岩、など、やはり岩の意がある。

第2章では、岩や石のことが強調されている。Cobble stone (p. 31), copestone (p. 34), curbstone (p. 34, 35) には、墓石の意からはじまって、建築のための礎石の意があるだろう。Peter には、いうまでもなく、岩の意があるほか、天国の鍵をあずかる人、天国の番人としての意がある。

したがって、Carpet-bag は、ずだ袋、体を包む物の意があるだろう。Lazarus のことが語られているので、Carpet-bag にはミイラを包む布の意があるだろう。次の文は、Dives の戸口でふるえている Lazarus のことであるが、彼が墓の中で復活を待っている姿でもある。tatters や lint は、ぼろ服のほかに、ミイラを包む包帯の意もあるだろう。

『白鯨』のかくれた意味と象徴について(3)

Poor Lazarus there, chattering his teeth against the curbstone for his pillow, and shaking off his tatters with his shiverings, he might plug up both ears with rags, and put a corn-cob into his mouth, . . . (p. 34)

つぎの文でも, carpet-bag に体を包むものの意がこめられているのがわかる。

But no more of this *blubbering* now, we are going a-whaling, and there is plenty of that yet to come. Let us *scrape* the ice from our frosted feet, . . . (p. 35)

blubbering には, 泣きごとをいう, と, 毛布と呼ばれる鯨の皮の意がある。blubber をはがすとき, 包帯をくるくるとはがすように, scrape していく。blubbering と Carpet-bag は, どちらも Lazarus の体を包むことに関連しているだろうから, この章は, 復活について語られていることになる。

上の引用文では, Lazarus の体には, 隙間をぼろ布でふさいでいるので, ミイラの防腐処理と, 船の水もれ処理の両義がかかっているのに気づく。水もれは, 船の沈没をふせぐためであるが, これは, 宿屋の Spouter-Inn と関係がある。

Coffin?—Spouter?—Rather ominous in that particular connexion, thought

I. (p. 33)

Coffin と Spouter の両方を並べて関連づけると ominous になる, とのべられていることから, Spouter は, 船に穴をあけて, 船に水を噴き込ませるもの, の意と思われる。したがって, Spouter-Inn の Inn は In (中へ) の意があるだろう。Ishmael が Spouter-Inn にくるまでに見た宿屋は, The Crossed Harpoons と Sword-Fish Inn と The Trap であっち。はじめの二つは, どちらも, 突いて穴をあけるもの, The Trap は, 落ちる, したがって, 船が沈む, の意が汲みとれる。

ところでこの章では, 船, 体, 家, 棺, が, たがいに identity を共有しあうものとして, たとえられている。それぞれが Lazarus にたとえられているようである。

Spouter-Inn は

the dilapidated little wooden house itself looked as if it might have been carted here from the ruins of some burnt district (p. 33)

どこかの焼け跡から移されたような家である。これは, Trap に火山の連想があって, Ishmael が, Trap の入口で, 灰箱につまづいて, 舞い散る灰にむせかえるのと, あわせて考えると, 火山の火の中からよみがえる不死鳥が暗示されている。

Spouter-Inn は, 切妻造りの古家 (a gable-ended old house p. 33) である。正面から見た切妻は, coffin の形に似ている。すぐ前にある pea coffee (p. 33) にもふくみがある。pea coffee には, Peter Coffin と同じような残響音がある。Coffin は, 船と形が似ている。Poor Paul's tossed craft (p. 34) は, さきあげたすき間風の吹きこむ Lazarus の体

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

とだぶりあってくる。Spouter-Inn は、風のきびしい、わびしい十字路に立っている (It stood on a sharp bleak corner p. 33~34)。十字路や十字交叉や十字形をするものはなんであれすべて拡大解釈すれば、十字架の表象になるから、Spouter-Inn の家屋の形は、coffin や墓石のイメージをもつ。

Lazarus の口につめた corn-cob は、船の水もれをふさぐと、口にくわえたパイプ、の両義があって、パイプの煙は、Lazarus が生きている、あるいは、復活する、のしるしだろう。

第2章は、第3・4章との関連において読むべきである。第3・4章には、かくされた意味として墓石、十字架、岩、暗黒、寒さ、などの死の比喩があるが、火山、噴火、灰など、復活が同時に示唆されている。

Ishmael と Quequeg が使用することになる bed は、新しい、堅固な岩であり、復活を約束する Coffin である、と理解するべきであろう。New Bedford の地名は、Peter Coffin の bed が死と復活を内包するものとして理解されるべきであろう。この関連において、Lazarus について、もう少し考えてみなければならぬ。つぎの文はどうであろうか。

Can he (Lazarus) warm his blue hands by holding them up to the grand northern lights? Would not Lazarus rather be in Sumatra than here? Would he not far rather lay him down lengthwise along the line of the equator; yea, ye gods! go down to the fiery pit itself, in order to keep out this frost? (p. 34~35)

Lazarus と Orion が、重なり合せられている。Orion は、冬空の星である。Orion が両手を上にあげて立っている姿と、まずしい Lazarus が天をあおいで救いを求めている姿が重り合う。Lazarus はむしろ赤道に沿ってながながと横たわっている方がよのではないか、とのべられているが、Sumatra や Moluccas (p. 35) は、赤道周辺に位置する。北回帰線と南回帰線に囲まれた赤道帯は、地球の帯であるが、この帯は、この作品の中では、しばしば、十字架の横梁^{はり}に見たてられている。Lazarus は、十字架の横梁の上によこたわっていた方がよいのではないかと Melville はいっているようにおもわれる。縦梁は、真昼の太陽光線など、上から垂直に下りてくる光、または上から下へ移動する運動など、形のないもので、しばしばあらわされる。洋上で、船の前方に、左右に広がる地平線の糸も、十字架の横梁である。そうすると、go down to the fiery pit itself の上からの落下は十字架の縦梁を意味するもので、復活するためには、まず死を経験しなければならない。落下は、復活にさきだつ crucification である。Trap 亭は、落とし穴、つまり、pit の意である。Ishmael は Trap 亭を、Black Parliament sitting in Tophet と形容しているが、復活を願うものは、まず十字架を負って、黄泉に下らねばならない。船は、キリストの降誕祭の日に出発することになるが、それにさきだつ一週間は、待降節の最終週である。Ishmael は、一年でもっとも暗いその一週間は海上へ出発するための準備期間

『白鯨』のかくれた意味と象徴について(3)

として過す。降臨祭は冬至祭でもある。その日から、太陽は日毎に長く地上に滞在するようになるから、冬至祭は、太陽の誕生を祝う一年のはじまりの日でもある。Ishmael は New Bedford と Nantucket で、太陽の運行に合わせて、通過儀礼としての死を経験することになる。

Trap には、黒い火山岩、の意味があることは、すでにのべた。Trap 亭に集っていた黒人たちは当然ながら黒い肌の色をもっている。彼らは、下界に降りた者たちのようである。Ishmael の出発点は、極北の地であり、極北の季節である。夜と冬が支配する New Bedford の空に、Orion が、両手を高くあげて、煌々と輝いている。それは、人間の心の中に復活を待ちのぞむ Lazarus がいて、それが夜空に投影されたもののようである。

つぎの文にも、永遠の生命を意味する暗示がある。

What a fine frosty night; how Orion glitters; what northern lights!
Let them talk of their oriental summer climes of everlasting conservatories;
give me (Dives) the privilege of making my own summer with my own coals.
(p. 34)

東洋の夏の、永遠につづく温室のような風土は、冬や死とは対極の状態であるから、この文には楽園志向の意がふくまれていると考えられる。everlasting conservatories には、永遠に保存される生命のふくみがあるだろう。また、oriental summer は、太平洋上赤道帯付近の、つねに太陽の輝く島々の風土のことであろうから、Dives の潜るという意味の垂直の動きが、赤道帯の水平線にたいして十字交差になることが考えられる。自分自身の夏を自分自身の石炭で作る特権を与えたまえ、にも、自分の力で永遠の生命を得たいという願望がかくされた意味として読みとれる。Dives は、いうまでもなく「ルカ伝」第16章の、下界に落とされた Dives のことである。またアブラハムの胸に抱かれる Lazarus と夜空の Orion が重ね合せられている。

第3章で、Ishmael は Queequeg に出会う。Spouter-Inn には、打ち捨てられた古船のようなおもかげがある。通路には煤けた油絵がかかっているのだが、その油絵には、第1章でおぼろげに影をあらわす巨大なるものが描かれている。なにものかの力によって動かされようをしている混沌、といったものようだ (chaos bewitched p. 36)、と Ishmael は思う。

その絵は、つぎのような状態を描いている。

It's the Black Sea in a midnight gale,—It's the unnatural combat of the four
primal elements, —It's a heath. —It's a Hyperborean winter scene. —It's the
breakingup of the ice-bound stream of Time. (p. 36)

原初の四大元素の不自然な状態の相剋、これは、天地開闢の瞬間を想像したものらしい。創世紀の創造のはじまりと対比してみよう。

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

And the earth was without form, and void; and darkness was upon the face of the deep. And the Spirit of God moved upon the face of the waters. unnatural や, chaos bewitched などから, これから創造が始まろうとして, 神の霊が積極的に働いている様子がうかがえる。上の Melville による描写では, 真夜中の嵐の状態の黒海, とあるが, 黒海は, いうまでもなく, 暗黒の海, という意味が強調されて大文字で綴られているのであって, 特定の黒海という湖が問題にされているのではない。この絵について, またこの絵を描いた画家について, つぎのようにも述べられているが,

Such unaccountable masses of shades and shadows, that at first you almost that some ambitious young artist, in the time of the New England hags— had endeavored to delineate chaos bewitched, (p. 35~6)

New England についても同じことがいえる。New England という地名が問題にされているというよりは, England は, 新しい天使の国といったような本来の語源の Angel's+land の意味にも用いられていると考えた方がよいだろう。

引用した Melville の文も, 創世紀の文も, 闇が水面をおおっていて, 固く休止していた時 (Time) の流れが, 氷が割れるように, 突然, 脈動を開始しはじめた様子が描かれている。時は, 冬と闇とそして死の状態から目ざめ息づきはじめたのである。

ということは *Moby Dick* の物語の最初の部分は, 創世紀の天地創造の始まりと一致した状態をまねて書きおこされていることになる。

画家は巫女時代の New England のだれか大志を抱いた青年画家であろうと述べられている。おそらく, その青年は, Ishmael と同じように, 予言者の素質があるにちがいない。靈感にみだされて青年はその絵を描いたのだらうと Ishmael はのべている。

この絵の中央に, 闇と影につままれて, 垂直にのびた三本の帆柱と, その帆柱の上に, わが身をくしざしにしようとして身を投げだすかに見える巨鯨の姿がうかがえる。巨鯨がキリストの受難像と重ね合せられている。この受難像の槍で突くという概念が, Spouter-Inn ではしばしば暗示されている。Spouter-Inn に着く前に, Ishmael は Crossed Harpoons と Sword-Fish Inn の前を通過している。Crossed Harpoons には, 十字架のイメージがふくまれているから, これにもまた受難像の意がある。Spouter-Inn も, 汐が中に吹きこんでくる, の意がうかがわれるから, 船にとっては, Spouter-Inn は, 槍のように突くもの, の暗示がある。つぎの文にも, 突き刺す, の意がある。そしてこの場合, 靈感が Ishmael を突き通すのである。こういったことには, キリストが十字架上で槍を横腹を突かれるイメージもふくまれていることはいうまでもない。

Ever and anon a bright, but, alas, deceptive idea would dart you through.

(p. 36)

稲妻のようにひらめくが, しかし判別のまぎらわしい, ある概念が Ishmael にひらめく。

『白鯨』のかくれた意味と象徴について(3)

絵が意味するものを、Ishmael は懸命に、(by dint of much and earnest contemplation, and oft repeated ponderings) (p. 26) 理解しようとする。結局、多くの長老たちの意見を総合して、Ishmael は、すでにのべたように、この絵は、鯨の受難像であると結論する。つまり、

The picture represents a Cape-Horner in a great hurricane; the half-fouled ship weltering there with its three dismantled masts alone visible; and an exasperated whale, purposing to spring clean over the craft, is in the enormous act of impaling himself upon the three mast-heads. (p. 36~7)

絵の中の船は、Cape Horn を通過しており、嵐の中で、帆布をはがれて三本の帆柱だけが見えている。なかば沈みかけている。これは Pequod 号の最後と符号する。

この絵は、不思議な絵である。天地創造のときに、すでに、受難が予想されていたことになる。鯨は生物のうち、最初の被造物であったことは、すでにのべた。そのことには意味があって、鯨というものは、なにか受難と栄誉といったようなものを予想されて創られていた、といったふうに、描かれているようである。こうした理解は奇想であるとみえるだろうが、Ishmael は、そうした考えがまったく不当ともいえない、(such an idea, however wild, might not be altogether unwarranted) (p. 36) と云って、ことわっている。キリストの受難は、人間を贖うためにある。鯨の受難も、なにかそういった考え方の延長線上にあるのだろう。神は、人間をお創りになったときに、人間の墮罪をすでに承知しておられたはずである。人間の創造にさきだって、贖罪の方法がすでに用意されていたかも知れないのである。そういった意味が、この絵には暗示されている。

絵の中の船は、Cape Horn 廻りの船である。Pequod 号は、Cape Horn を廻っていないようにみえる。しかし実際は、Pequod 号は、Cape Horn を通過しているのである。Cape of Blanco (p. 37) は、Peru の捕鯨漁場であるが、この岬は、赤道に近いことと、Blanco に白色の意があるために、言及されているものとおもわれる。白は、つもの色であり、いうまでもなく、白い骨の連想がある。つもの岬の、つもの、にも、もちろん、突くもの、の意がある。絵の向い側の壁には、多くの捕鯨用の、突くための武器が飾られている。

ここで気にかかることは、絵の作者が、ambitious young artist と形容されていることである。ambitious にはかくされた意図があるだろう。Ishmael が、この絵の主題について論議をした人々は、many aged persons である。Spouter-Inn には、Jonah 老人と Peter Coffin 以外に多くの長老がいるとは考えられない。一つの仮説をたてよう。Ishmael が Spouter-Inn に泊ることは、死を経験する、あるいは、死から出発する、などの通過儀式と受けとることにすれば、Trap で灰箱につまづくことも、Quequeg との婚礼の儀式らしきものも、すべて、なんらかの通過儀式と考えられる。artist には職人の意もあるから、ambitious は、なにか秘教的な意味をもつ職人組合に入信するための発意をおこした、と

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

いったような意味に受けとれる。そうすると、many aged persons は、その団体の長老たちということになる。そうすると、Spouter-Inn は、その団体のさまざまな、修練の段階のための、集会の支部、つまり Lodge ということになる。Lodge には、宿の意と、もう一つかくされた意味とがあることになる。その団体は、いうなれば、捕鯨職人が入信する特殊な騎士団のようなもの、と考えていいのではないだろうか。物語の各章をあらわす Chapter という語にも、章、の意のほか、支部、の意があって、各章がその章固有の特殊な意義と主題をあらわして、各章は、精神の進化のための各段階を意味していることにもなる。また捕鯨そのものが、魂の練成・変容といったかくされた意味を伝えるためのまったくの象徴であるかもしれない。

Ishmael は、暗い、低い穹門造りの通路を進んでいくが、これは、鯨の体内くぐりのようなもので、Ishmael にとって、冥府行といえるだろう。Spouter-Inn の家造りは、gable ended (p.33 & 35) であると、二度にわたってのべられているが、このため、Spouter-Inn が、ark (p.37) や coffin のかたちと重なり合うことになる。Etymology (p.5)で、鯨の語源として、arched or vaulted また roundness or rolling があげられていることからわかるように、通路の、yon low-arched way の arched は、鯨の形状をさしている。拱門状のもの、円屋根状のもの、円状のもの、円転する、などは、鯨の形態として要約されているのだが、同時に、青天井や神殿の柱廊の天井、から、鯨の^{あぎと}脰門などの暗示があって、また、円状のもの、円転する、などには、船とその動き、などの暗示があって、鯨の象徴性が、大きく拡大されることになる。そうすると、

of such a howling night, when this corner-anchored old ark rocked so furiously. (p.37) から、Spouter-Inn が、嵐にもまれる箱船のようにつるばかりでなく、冥府の底深く、大地の胎内で、死を経験している者たちの集まる場所であるかのように、連想が拡大されてくるのである。Jonah 老人の主宰する酒場 (bar) は、試練と裁きの場でもあって、ここでは、さまざまなガラス容器から取り出されて、さまざまな錯乱状態と死が高価な値段で売られている。ここは、Dives の落ちていくところであるようだ。それについては、つぎのようにのべられている。

...in those jaws of swift destruction, like other cursed Jonah bustles a little withered old man, who, for their money, dearly sells the sailors deliriums and death. (p.38)

酒場は、せみ鯨の脰の中に模せられてあって、抹香鯨の口中のようではない。これには意味があり、第75章、*The Right Whale's Head* で Ishmael はこれについて説明している。

老人が毒を注ぐ杯は、円筒形をしている。その内側は、つぎの型に先細りになっていて、表面には、平行に子午線が目盛りがきざまれている。ここでもホーン岬が象徴として意味をもつ。酒は、Cape Horn の目盛りまで注いで、1 シリングで売られている。子午線は、

『白鯨』のかくれた意味と象徴について(3)

上からおりる垂直線であるから、横に平行な子午線はおかしいが、ここでは、上から下へ一直線に降りる、の意が強調されているためとおもわれる。飲み干す、の意も *gulp* と綴らずに、*gulp* に *f* をつけ加えて、*gulpf* とまぎらわしくさせて、じつは深い淵、の *gulf* と掛けている。前章の *Dives* の名前に掛けてある、降下、の意が、いっそう鮮明になってくる。*divers* (p. 38) も、同様に、掛けことばだろう。

同時に復活が死から出発して上に昇るものであるように、一度下ったものが再び上昇することが可能であるかもしれないといった暗示がみうけられる。

And that harpoon—so like a corkscrew now— was flung in Javan seas, and run away with by a whale, years afterward slain off the Cape of Blanco. The original iron entered nigh the tail, and like a restless needle sojourning in the body of a man, travelled full forty feet, and at last was found imbedded in the hump. (p. 37)

original iron と *restless needle* には、磁石の針の意味が掛っている。*restless needle* は、また、第1章の、*does the magnetic virtue of the needles of the compasses of all those ships attract them thither?* (p. 24) との関連もうかがわれる。正しい方向へ導く指針、の意があるようである。*a restless needle sojourning in the body of a man* の意味がきいてくるのである。*original iron* の *original* には、生来そなわっている、の意も感じられる。羅針のような銚が、Cape of Blanco の漁場で仕止められた鯨の *tail* から *hump* へ移動していたのが認められた、とあるが、これは、銚が、下部から上部へ上昇したことになる。第3章には、突き刺すもの、死をもたらすものとしての銚が、主題になっているが、その銚には、上昇するもの、の意も汲みとれることになる。汐吹き亭の汐吹きも、下から上に上昇するものである。Spouter-Inn の玄関通路に掛っている絵の中の鯨が、帆柱にその身を刺しつらぬこうとしているのと、Cape of Blanco で鯨が仕止められたこととは、意味のつながりが考えられる。どちらの鯨にも、十字架上の受難像が重なり合っているようである。後者の鯨の場合、尾部から頭部へ上昇した銚の軌跡が、十字架の垂直の柱、の意味をもつ。Cape of Horn や Cape of Blanco など、岬の形状が、つの型をしており、突くもの、死をもたらすもの、の暗示があるため、Cape of Horn は、どうしても、Cape of Good Hope と対称をなすもの、として理解すべきであろう。Cape of Good Hope を、復活の希望を暗示する柱として、とらえる必要があるだろう。Melville は、故意に、Cape of Good Hope について言及しないのではないかと推測できる。Melville はなかばもらし、なかばかくすといった、手法を、終始くずしていないからである。

上の引用文に、*Javan seas* が言及されているが、これは、第2章の、*Sumatra* や *Moluccas* (p. 35) と同じく、赤道付近の生命にあふれる常夏の海、として言及されたのであろう。赤道は、太陽にもっとも近い距離にある。太陽は、復活と永遠の生命の象徴である。太陽

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

は、日の出、日没によって、日々に死に、日々に復活するからである。不死鳥と黄金は、太陽によって象徴される。黄金は、腐蝕をまぬがれているからである。Cape of Blanco は Peru にあって、Doubloon の鑄造された REPUBLICA DEL ECUADOR: QUITO (p. 550)に近い。どちらも赤道付近に位置している。

Spouter-Inn の玄関通路から、酒場になっている大部屋に入っていくには、四面に暖炉のある大きな煙突をくり抜いて作った拱門状になった道をくぐり抜けて入らねばならない。煙突は、Gehenna の火を思わせるが、同時に、火山、の表象も含んでいて、不死鳥や復活の表象へと敷衍解釈することができる。したがって煙突は、地上に直立する柱として、死と復活をつたわせ、生命の下降と上昇を司るものであるといえる。第2章で、Ishmael が Trap 亭の入口で灰箱につまづくことと結びついているとみてさしつかえないだろう。

Spouter-Inn で Ishmael は、Bulkington に出会う。Bulkington は、Grampus 号 (=killer whale p. 40) の船員であった。Peter Coffin が、Now, we'll have the latest news from the Feegees. (p. 40) というが、Fiji は、ETYMOLOGY ですでのべたように、Pequod 号が沈んだ場所の付近であり、Bulkington はそこから帰ってきたばかりであった。Bulkington については、第23章 *The Lee Shore* で、のべることにする。

Grampus 号の船員たちが、入口からなだれこんでくる。その姿は、Labrador の熊のようである。

Enveloped in their shaggy watch coats, and with their heads muffled in woollen comforters, all be derved and ragged, their beards stiff with icicles, they seemed an eruption of bears from Labrador. (p. 40)

ひげは、つららでこわばり、衣服も、頭からかぶった羊毛のえりまきも、ぼろ布になって、彼らは、熊のようであった。Ishmael が New Bedford に着いて、この地の極北の風景から、*Moby-Dick* の物語が始まることになるが、これにも意味がある。*Moby Dick* では、しばしば海と空とが対比されている。地球上に存在するものは、天空にも存在する、という考え方が古くから西洋にあるが、そういう考え方が、この物語の中にもうかがえる。天上に存在する星空などは、時空に解き放たれているため、普遍性と不滅性をそなえているが、超絶主義の考え方では、また超絶主義の由って来たるもととなったカントの観念論においても、現象界に存在するものは、星空であれ、太陽であれ、宇宙全体が、その同じものが、一人一人の人間の内面に存在する、と説かれている。人間の内面というのは、潜在意識、といいかえた方がよいかもしれない。いずれにせよ、星空も、人間の内面に存在するとすれば、すべての出発点は、極北、すなわち、北極星にある。星空を見て、船の位置と進路を定めるとき、まず北極星を見つけることから観測がはじまる。北極星を見つけるためには、北斗七星が、そのための手掛りとなる。北斗七星は、Great Dipper と呼ばれ、

『白鯨』のかくれた意味と象徴について(3)

大熊座の一部である。Labrador の熊たちのような船員から、大熊座が連想される。

大熊座にさきだって、Great Dipper についても、暗示がある。Jonah 老人がすわっている酒場には、酒精をいれたさまざまな容器がある。Jonah 老人は、杯 (tumbler) から、船員たちに、高くつく酒を売っているが、その姿から、酒を汲むための Great Dipper が連想される。その個所はすでに引用したが、違った角度から眺めることができる。

Abominable are the tumblers into which he pours his poison. Though true cylinders without—within, the villanous green goggling glasses deceitfully tapered downwards to a cheating bottom. Parallel meridians rudely pecked into the glass, surround these footpads' goblets. (p. 38)

tumblers や cylinders が Dipper を暗示しているほかに、green goggling glasses は、緑色にキラキラ輝くガラスのような星々、と読みとれる。footpads' goblets も、そうである。footpads'には、おいはぎ、の意もあるが、これは、まれな用語であって、どちらかといえば、熊などの動物の肉趾、の意が、つよくひびく。大熊座では四本の脚の、二つづつの肉趾が、この星座をみつけるための特徴となっている。すでにのべたように、Parallel meridians は、経線の意がつよくひびき、緯線と解するには、無理がある。星図を表わすにも、緯線、経線があるから、Parallel meridians は、星図表の経線の意が掛っていて、星測によって出発点を定めるための意が、うかがわれる。すぐ前にある downward ~ to bottom も、meridians が経線であるかの印象を、暗に与えている。この個所にすぐさきだって、足について暗示があるので、footpads と関連があるだろうと想像できる。それは with his feet on the hob quietly toasting for bed (p. 34) と Let us scrape the ice from our frosted feet, (p. 35) である。

また、つぎの文にも、北極星と大熊座の位置についての暗示があるものとおもわれる。

The original iron entered nigh the tail, and like a restless needle sojourning in the body of a man travelled full forty feet, and at last was found inbedded in the hump. (p. 37)

尾のところから入って、とあるが、杓の柄は、大熊座の尻尾にあたり、尻尾の長さを延長して、北極星を探し出すのは、知られているとうりである。引用文からは、尻尾のところから40歩延長して、といった意が感じられる。like a restless needle にも、北極を指す磁針といったようなふくみがあるだろう。restless には、つねに北天にあって作動している、の意がある。

北極星や大熊座は、常冬の極北の地点であり、そこは死の支配するところ、闇の世界である。そこは、jaws of swift destruction (p. 38) であり、deliriums and death (p. 38) の世界である。Jonah 老人は、Cape Horn の目盛りまでの酒を a shilling で売るが、a shilling には、a shilling もらって勘当される、の用語があるから、水夫の所持金すべて、

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院「研究集録」

の意があるだろう。shilling は、昔、米13州の通貨の単位であった。Spouter-Inn は、深き淵である。Dives の名の降下の意がきいてくるのである。

ここは、また、Golgotha (しゃれこうべ) の丘である。入口の通路には、怪物のような顔をした棍棒やら槍が飾られている。これらは歯や髪が生えているように見えて人間の頭蓋骨のようである。Queequeg が脳天を売り歩いているのと比較できる。

The opposite wall of this entry was hung all over with a heathenish array of monstrous clubs and spears. Some were thickly set with glittering teeth resembling ivory saws; others were tufted with knots of human hair; and one was sickle-shaped, with a vast handle sweeping round like the segment made in the new-mown grass by a long-armed mower. (p. 37)

これらを刈りとられたばかりの生命のように、Ishmael は感じる。

しかし Golgotha の丘や深き淵こそ、復活のための出発点である。北極星や大熊座こそ、生命の探求の航海のための出発点である。深き淵の認識こそ、生命の水をたたえた聖杯探求のための出発点である。そうすると、Jonah 老人は、世界の隅々から集められた酒精を、Cape Horn の形をした、緑色に輝く杯から注いで売っていたが、これは、すでに、生命を約束する聖餐式の杯なのだ。それでは、パンはどこにあるかといえば、Spouter-Inn では晩の食事に、dumplings が出されるのである。

But the fare was of the most substantial kind—not only meat and potatoes, but dumplings; good heavens! dumplings for supper! One young fellow in a green box coat, addressed himself to those dumplings in a most direful manner. (p. 39)

the most substantial kind や good heaven などには、天上のもっとも豊かな食物、といったかくされた意味が感じられる。green box coat の green は、green goggling glasses の green と同じ色である。ごく単純に考えれば、green は、樹木の色であるから、生命や希望を表わすだろう。box は、ミイラを入れる櫃の意が感じられ blanket (p. 38, 39) や winding sheet (p. 39) と同じ関連のもとに、使われている。box は、Bulkington の coffer-dam (箱) のような胸と同じく、coffin の連想がある。Bulkington という名にも、なにか、かさばるもの、箱のような、舟のようなもの、を連想させるものがある。

こういった coffin の連想は、すべて、さきにもべた Spouter-Inn の意義に集約され、結局、Ishmael と Queequeg が、bed をともにする、このことが、やはり通過儀礼として、意味をもつことになる。bed をともにする、死を通過するといった秘儀として意味をもつのであって、Ishmael は、つぎの文に示されているように、このことは世俗の意味 (earthly reason) によるのではない、といている。

『白鯨』のかくれた意味と象徴について(8)

Nor was there any earthly reason why I as a sailor should sleep two in a bed, more than anybody else; (p. 41)

Queequeg が Ishmael の bed fellow になるように, Bulkington も, Ishmael の sleeping-partner shipmate (p. 41) になるよう, 海神によって運命づけられている, と書かれている。このことについては, 第23章 *The Lee Shore* で, 取りあつかうことにする。

要するに, New Bedford の地の Spouter-Inn では, bed が主題になっている。意味の不明な点が多分にあるが, できるかぎり解散してみよう。

Queequeg が帰ってくるのは, 真夜中の12時である。時刻が真夜中であることについては, かなり強調されている。時は, 土曜の夜の12時頃である。

he should tumble in upon me at midnight (p. 42) It was now hard upon twelve o'clock. (p. 43) that this harpooneer is actually engaged this blessed Saturday night, or rather Sunday morning, in peddling his head around this town? (p. 43) It was on a Saturday night in December. (p. 30)

Moby Dick の全篇を通じて, 秘儀がとり行われるのはほとんどのばあい, 正午, そして日の出, 日の入り, の時刻, つまり昼夜の6時か12時のいずれかの時刻においてである。Queequeg が土曜の夜に脳天を売り歩いていることや, Ishmael と Queequeg が土曜の夜の12時に bedfellow になるために出会う, などは, Golgotha が, しゃれこうべの丘の意であることや, 日曜が主の日であることなどから考えれば, 復活のための, なんらかの儀式と考えざるをえない。

bed は, Peter Coffin と妻の Sal が使っていたものである。Sal は, Abraham の妻 Salah の名である。聖書では, Ishmael の継母にあたる。次章の *Counterpane* で, Ishmael は, 彼の継母について語るが, 第132章の *Symphony* (p. 682) でも, Ishmael は 継母についてふれている。Sal は, bed の足もとに, 息子たち Sam と Johny を入れていたが, ある晩, Peter Coffin が夢を見て, 手足をのぼし, のたくったものだから, Sam が, 床に落ちて, あやうく腕を折るところだったことがあった。Sam は, Samuel の略であり, 聖書では, Samuel は予言者である。注目すべきは, Samuel の母の Hannah が主に捧げたた祈りである。

my horn is exalted in the Lord (Sam 2:1)

neither is there any rock like our God. (2:2)

The Lord killeth, and maketh alive : he bringeth down to the grave, and bringth up. (2:6)

for the pillars of the earth are the Lord's, and he hath set the world upon them (2:8)

He will keep the feet of his saints, (2:9)

and (He shall) exalt the *horn* of his anointed. (2:10)

Hannah は、力を表わす語として、*horn* を使っている。*horn* は、Cape Horn とあわせてとらえられるべきである。Cape Horn は、*the pillars of the earth* の柱のうち的一本、と考えられる。もう一本は、Cape of Good Hope であろう。*rock* と、Bedford の *ford* とは、同じ意味であろう。神は低くし、また高く上げられる、は、下降と上昇、つまり死と復活を示している。Hannah の祈りは、表象として、Spouter-Inn の主題と、いや *Moby-Dick* 全体の主題と、かさなり合うといえるだろう。聖徒の足を守られる、とあるが、足についての比喩も、この作品の中で、大きな役割を果たしている。Samuel は、亜麻布の法衣 (*linen ephod*) (2:12) を着ているが、これも緑色の箱型の上衣を着てだんごを食べている若者と、かさなり合ってくる。Peter Coffin のもう一方の息子の *little Johny* は、黙示録の著者とされる幻視者 John の名から取ったのだろう。Samuel も John も予言者である。Ishmael もそうだろう。

北に対して、南は、太陽に近いためか、楽園とか、生命など、のイメージをもつと考えられる。Bulkington は Southerner (p.41) である。Queequeg も、南海から帰ってきたばかりである (*this here harpooner I have been tellin' you of has just arrived from the south seas*) (p.44)。Queequeg は New Zealand で香を焚きこめた頭骨を手に入れてくる。それでは、New Zealand に、なにか新しい海の国とでもいうべき意味がこめられているのかもしれない。ところが Ishmael は、南海に行ったことがない、といっている (*I have never been in the South Seas*) (p.48)。Melville は、*Moby-Dick* を書く以前に、南海に行ったことがあるにもかかわらずである。

Ishmael は Queequeg が室内に置いてあった変な外套らしきものを試着してみる (p.46)。おそらくこれは、第95章 *Cassock* で、きざみ係が着ているものと同じだろう。door mat のような材質で、中央に首をとるす穴があけてある。第16章 *The Ship* で、Pequod 号の甲板に張ってあるテントも、おなじ形に見えるだろう。Queequeg が持っている Congo idol のような木偶にも、同じような意味あいがあるかもしれない。また、第3章の表題になっている Spouter-Inn の意味にも、同じような含みがあるだろう。

Queequeg は、木偶を削って燃やす。Peter Coffin も木屑を削る。はじめは、楊子を削っている (p.44)。つぎは、Ishmael の *bed* にしようとして、椅子を削る。Queequeg が、手斧のパイプを吹かすこととあわせて考えれば、なにか香を焚く、煙を吐き出す、などに儀式めいたものが感じられる。パイプの煙を吐き出すのは、鯨の汐吹きをまねているのかもしれない。

Queequeg が、何者だ、云わなきゃ、ばらすぞ、と Ishmael にいうくだりがある。

“Speak-e! tall-ee me who-ee be, or dam-me, I kill-e!” again growled the cannibal, while his horried flourishings of the tomahawk scattered

『白鯨』のかくれた意味と象徴について(3)

the hot tobacco ashes about me till I thought my linen would get on fire.
(p. 51)

Queequeg がふりまわすパイプの熱い灰が、Ishmael のリンネルに燃え移りそうになる、など、不死鳥伝説が、通過儀礼として、この文には感じられる。Ishmael が Peter Coffin を呼び求めると、Peter Coffin が灯を持って入ってくる、など、Peter Coffin が、天国からの使者、のような印象を与える。この引用文には、もう一つの特色がある。kill-me と cannibal と tomahawk である。Queequeg は、頭骨を売っているから、cannibal と呼ばれている。Queequeg が cannibal であるのは、それだけの理由にとどまらない。tomahawk は大鎌を意味し、Queequeg は、人の命を刈り取る pale rider を意味しているようである。Ishmael は、ここで、通過儀礼として、死を経験し、そしてよみがえったことになる。Queequeg がする動作なり行為なりは、さりげなく見えても、すべて意味があると考えられる。彼は、たいていのばあい、死と復活に立ち会うのである。彼は、復活をたすけるのである。しかも彼の風貌は、死そのもののようである。

Such a face! It was of a dark, purplish yellow color, (p. 47)

His bald purplish head now looked for all the world like a mildewed shull. (p. 48)

Queequeg の顔は黒ずんだ、紫がかかった黄色をしている。彼の毛髪のない紫がかかった頭は、かびが生えた頭骨に見える。Ishmael は、Queequeg が帰ってくるのを不安にかられて待つあいだ、死を経験した、といえる。

... whether that mattress was stuffed with corn-cobs or broken crokery, there is no telling, but I rolled about a good deal, and could not sleep for a long time. (p. 47)

ふとんには、とうもろこしの軸か、瀬戸かけがつまっていたものか、と Ishmael は、いぶかる。瀬戸かけは、Potter's Field をおもわせ、Corn cob は、Lazprus (p. 34) が寒さと水もれを防いで口につめ込んでいたものである。Queequeg は、たびたび、人を死から復活へ助け渡す産婆役を果す。Ishmael は、この同じ bed で、Queequeg とともにこの夜、今まで味わったことのない安眠を得る。(I turned in, and never slept better in my life. (p. 52)

第3章と前後の章にまたがって見られる表象がある。それは、身にまとうもの、としての、衣服および敷布団、などである。Carpet-bag や Counterpane など、すべて、中心になる概念は、寝台、である。New-Bedford の地名が、かくれた意味をもっているのである。

注：原文の引用は *Moby-Dick or the White Whale* ed. by Charles Feidelson, Jr.(Bobbs Merrill) による。